

## 川嶋昭二：米国の黒船が採集した箱館と下田の海藻標本里帰り展

今年（1995年）6月17日から25日までの8日間、北海道函館市の市立博物館で「黒船が採集した箱館の植物標本里帰り展」が開催され、1854年（嘉永6年）および1855年（安政元年）に来航したアメリカの黒船が箱館（函館の旧名）と伊豆の下田で採集した種子植物76点と海藻30点の標本が140年ぶりに里帰りし一般に公開された。また、初日にはこれに関するシンポジウ



図1. 展示された海藻標本。1種類ごとに標本、生態写真、解説がアクリルケースに納められている。

ムも行なわれた。なかでも海藻標本の里帰りと公開はこれが初めてのことで話題を呼んだ。展示は1種類ごとに標本に生態写真（または図）と解説文を添えて理解しやすくし、連日会場において標本についての説明会を行なった。さらに参考資料として函館市立図書館所蔵の黒船箱館来航関係資料や江戸時代に我が国を訪れた外国人植物学者の貴重な著書などが多数陳列された。会期中は市内や近郊はもちろん、遠く札幌、旭川や青森県、神奈川県などからも植物研究者や自然愛好家をはじめ関心を寄せる人びとが訪れ、見学者は計2,154名に達した。一地方都市での、しかも一見地味で学術的色彩の濃い催しにしては予想を超える成果であった。さらに海藻分類学の点でも標本に関するいくつかの新知見が明らかにされたことは幸いであった。

アメリカ海軍の Matthew C. Perry 提督が率いる4隻の黒船が1853年に浦賀に来航した。彼等の目的は我が国と国交を結ぶことや、捕鯨基地を確保することなどであったことはよく知られているが、そのほかに我が国の植物をできるだけ多く採集して持ち帰るという科

学的な目的もあったことはほとんど理解されていない。実はこの植物採集はハーバード大学教授 Asa Gray が当時知られていた日本と北米東岸の類似植物の隔離分布を研究するために海軍に依頼して行なったもので、その一回目は1854年に再来日したペリー艦隊に同行した S. Wells Williams と James Morrow により下田と箱館で陸上植物と海藻の採集が行なわれている。また、二回目は1853年から1855年にかけて John Rodgers 提督指揮の2隻の黒船が北太平洋地域の科学的調査を目的とする探検を行なった際に、Charles Wright と J. K. Small によって琉球列島、小笠原諸島、鹿児島、奄美大島から、さらに1855年5月に下田、6月には箱館でも多くの海藻を含む植物が採集されている。それらのうち海藻についてはアイルランドのダブリン大学教授 William S. Harvey の研究によって多くの新種が発表され、初めて我が国の海藻の大意が明らかになったのである。

去年（1994年）10-11月にペリー生誕200年を記念して神奈川県藤沢市の日本大学農獣医学部において、ニューヨーク植物園に保存されている日本各地の種子植物標本101点が140年ぶりに一般に展示公開された。



図2. 展示標本を前にした説明会風景。

また、今年1月には下田でも展示された。私はたまたま藤沢で開催中のこの標本展を見学し、またこれらの標本を長年にわたりニューヨーク植物園で研究し、現在は日本大学教授としてこの催しを実現された小山鐵夫先生にお目にかかって話を伺うことができました。そしてこれらの標本のうち、せめて箱館を含む北方地域の

植物だけでもぜひ函館に里帰りさせたいと強く希望した。

函館における標本里帰り展はこのようなきっかけで図書裡会、函館日米協会、函館植物研究会が共催し、日本大学当局の物心両面にわたる多大の援助によって実現したものである。特に小山先生には標本の借用と移管に関するアメリカ側との交渉の一切をお世話頂いた。なかでも種子植物に加えてハーバード大学Farlow標本館所蔵の海藻標本を函館で初公開するという夢のような案の実現のために、先生はわざわざボストンまで足を運び標本の借用と発送の労を執って下さった。本来、標本は学術研究のためでなければ借用できないものであるから、日本側の受け入れと事前の調査を北海道大学理学研究科吉田忠生先生にお願いした。また増田道夫先生や同大学水産学部山本弘敏先生、斉藤讓先生にも協力して頂いた。先生方からは後述するような貴重なご意見を頂いた。

展示した海藻標本は箱館（Hakodadi）と下田（Simoda, Simodah）の採集品に限ったが、箱館産のなかには箱館湾（Hakodadi Bay）または津軽海峡（Straits of Sangar）と記録されたものが多い。次にこれらの海藻の和名を産地別に掲げる（\*印はTYPEの指定がある標本）。

箱館産：キヌシオグサ（箱館湾）、スジメ（津軽海峡）、ネプトモク（津軽海峡）、ヒジキ、エゾイシゲ（津軽海峡）、キョウノヒモ\*（箱館湾）、マツノリ\*、フクロフノリ（津軽海峡）、オキツノリ（箱館湾）、ヌメハノリ\*、モロイトグサ、ユナ（箱館湾）、ソゾ属の1種（箱館湾）（13種）

下田産：チャシオグサ、アミジグサ、ウミウチワ、イワヒゲ、イシゲ、イロロ、カヤモノリ、アラメ、ワカメ、ヒジキ、アカモク、オオバモク、ヨレモク、ヨレモクモドキ、タマハハキモク、イソモク、ヒラガラガラ、オニクサ、フシツナギ（19種）

これらのうち箱館、下田両地産のヒジキと、下田のイシゲとイロロはそれぞれ1枚の台紙上にあるために、標本点数は30であるが実際の種類数は31、両採集地の延種類数では32（箱館13、下田19）を数える。また、標本上に書かれた記録によると1854年の採集品は箱館のヌメハノリ（Morrow 採集）とモロイトグサ（Williams 採集）の2種類だけで、それ以外はすべて1855年にWrightが採集したことが分かる。なお、これらの標本について調査されたいくつかの点を整理しておく。

(1) ヌメハノリ、キョウノヒモ、マツノリの標本に

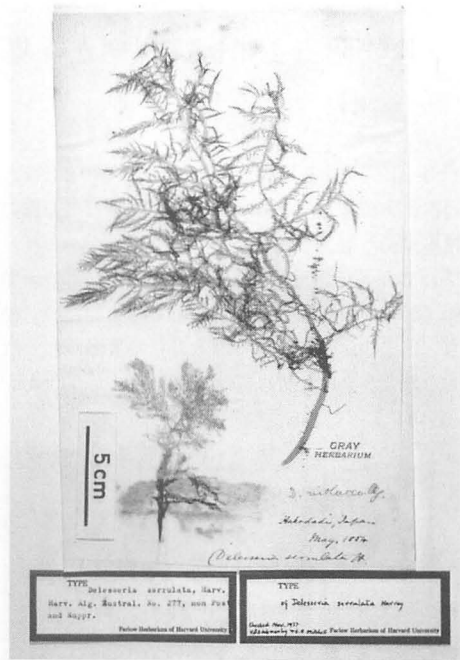


図3. ヌメハノリ *Delesseria serrulata* Harvey (holotype) 標本上に記録されている "Hakodadi, Japan May, 1854" と "*Delesseria serrulata* H. は筆跡が異なり、それぞれ Morrow と Harvey のものと思われる。また、右下のラベルには "TYPE of *Delesseria serrulata* Harvey, checked Nov. 1977, H. B. S. Womersley & E. A. Mitchell" とある。(吉田忠生先生撮影)

はTYPEと表記された赤枠のラベルが貼ってある。Harveyが研究したダブリンのTrinity College所蔵のタイプ標本との関係からヌメハノリはHolotype、キョウノヒモとマツノリはIsotypeとなる。

(2) 次の海藻標本はtypeの指定はないがHarvey, 1859. Characters of new algaeにおいて新種として記載されたものである。これらはいずれTrinity Collegeに同種類の標本が所蔵されているかどうかによってtypeとしての取扱が決まると考える：キヌシオグサ、ヒジキ、エゾイシゲ、フクロフノリ、オキツノリ、モロイトグサ、ユナ（以上箱館産）、チャシオグサ、イワヒゲ、イシゲ、イロロ、アラメ、ワカメ、オオバモク、ヨレモクモドキ、オニクサ、フシツナギ（以上下田産）

(3) 標本調査の結果、同定の間違いにより学名変更の必要なものは次のとおりである。なお、Harveyの命名した学名の後に付した括弧内には検索の便宜を考えてDawson, 1959. William H. Harvey's report on the marine algae of the United States North Pacific exploring

expedition of 1853 - 1856, Pacific Naturalist, Vol. 1, No. 5:1-40. に掲載されている頁と番号を入れた(この項以下も同様)。

*Padina pavonia* (p. 11, 39) とされたものはウミウチワ *Padina arborescens* である。

*Fucus babingtonii* (p. 9, 26) とされたものはイシゲ *Ishige okamurai* とイロロ *Ishige sinicola* の2種を含む。

*Ecklonia wrightii* (p. 10, 31) とされたものはアラメ *Eisenia bicyclis* である。

*Sargassum siliquastrum* var. *pyriferum* (p. 6, 6) とされたものはヨレモクモドキ *Sargassum yamamotoi* である。

*Sargassum confusum* (p. 7, 8) とされたものはタマハハキモク *Sargassum muticum* である。

*Laurencia paniculata* (p.16, 87) と同定された標本には箱館と琉球, Gasper Isl. を採集地とするものが含まれ, 複数の異なる種と思われる。*L. paniculata* は我が国から記録がない。箱館産の標本は *Laurencia saitoi* (マギレソゾ *L. obtusa* と同種?) と思われるが, なお精査する必要がある。

(4) 同種の標本は採集地が異なるものも1枚の台紙上に整理されている。これは恐らく日本を一単位として整理する方法を採ったためであろう。採集地には箱館, 下田のほか奄美大島, 琉球などがある。また, 田中芳男(キョウノヒモ, フクロフノリ), 矢田部良吉(カヤモノリ, イワヒゲ, オキツノリ), 宮部金吾(イソモク), 岡村金太郎(イシゲ, イワヒゲ, アミジグサ, エゾイシゲ), 牧野富太郎(オキツノリ)らが寄贈したと思われる標本も同じ台紙上であって興味深い標本となっている。

(5) 既述の(3)のほかにも同定の間違いがいくつか発見された。例えば, アミジグサ標本では Wright 採集の3枚(下田2枚, 琉球1枚)(p.11, 43)のうち琉球の1枚はイトアミジである。また, Wright が下田で採集したイソモク(p. 8, 17)の台紙の左上に宮部が小樽で採集し, 同種と同定した袋入り標本が添付されてい

るが, これはミヤベモクである。

(6) 以上のほかに標本の状態などを考慮して公開しなかった *Rytiphloea complanata* var. *pusilla* (p. 13, 67) はイソムラサキ *Symphyocladia latiuscula* で, 標本はその Isotype と確認された。

今回借用した海藻標本は140年の歳月を経ているにかかわらず少なくとも外観上は傷みがほとんど見られず, 色も比較的よく保たれていて, 見学者の感想もこの点に関するものももっとも多かった。また特に印象的であったのはこれらのほとんどが磯で容易に手に入れることができるごく普通の種類であったことである。黒船の採集者たちが開国前後の箱館や下田の海岸で人びとの警戒と好奇の目にさらされながらせきたてられるように海藻採集をしたであろうことを考えればそれはむしろ当然かも知れない。見学者からはこれらの海藻が今でも函館に生育しているかと言う質問が多かった。中にはマスコミから既に絶滅したり, 希少種となったものがあることを暗に期待したような取材質問もあった。標本だけからは140年前と現在の生育状態を比較することは出来ないが, 多くの人びとがこの里帰りした海藻標本を通して磯には今もなおそれらの子孫が生き残っていることに感動し, さらに将来に引き継ぐことに情熱を燃やしてくれることを願っている。

この里帰り展の図録が作られ, 全展示標本の写真と目録および黒船による植物採集の解説記事などが掲載されている。また別冊として全植物の特徴, 採集地, 分布, その他の記事を含む標本解説が付いている。図録(頒布価2,000円)は残部僅少(問合せ先:040 函館市青柳町函館市立図書館内図書裡会, 0138-22-7447)。

最後にこの催しに際し, ご指導を頂いた日本大学農獣医学部小山鐵夫先生, 東禎三先生, 渋谷知恵学芸員, 北海道大学理学研究科吉田忠生先生, 増田道夫先生, 北海道大学水産学部山本弘敏先生, 齊藤讓先生に厚く御礼申し上げます。

(〒041 函館市日吉町4-29-15)